

URL:fukushimafolklore.com

E-mail:fukushima.folklore1971@gmail.com

令和5年度 福島県民俗学会大会が無事終了しました

令和5年度大会 日程

日時:令和5年6月4日(日)

場所:福島県立博物館 講堂

- ◆ 研究発表 11:00~12:00
- ◆ 総会 13:30~14:00
- ◆ フォーラム 14:10~16:00

研究発表 要旨

◆ 四家久央氏

古文書と年中行事の再現

～四家家『定例帳』を素材として～

『定例帳』とは当家の先祖四家又左衛門福房(1784~1868)が嘉永5年(1852)にまとめ、安政4年(1857)に清書したもので、当家の年中行事や祭礼での献立等が記されています。ここでは、それを取り入れた年中行事をいくつか紹介します。

○正月飾り:定例帳には「御飾餅 歳徳神掛物の前へ 一、大鏡餅式重ね、菱餅三枚宛、其上へ串柿ニても釣し柿ニても上ル」元々(自分の小さい頃)は鏡餅の上に干し柿を10個(5連)束ねて載せていました。定例帳により菱餅3枚を加えるとなるとこれをどう飾るか不明でしたが、web検索の結果、鏡餅の上に重ね、さらに柿を乗せる形となりました。

○軒菖蒲:「(五月)四日 沐浴 今夕方菖蒲・蓬軒端へふく、神棚へも上る」元々は行っていませんでしたが、母の実家上三坂の田子家で現在でも旧暦で行っていたのでそれを参考としました。

○藁馬:「(七月)六日 沐浴 夕方小麦藁にて馬を造り式疋厩のぐしへ上る」何も伝わっていない状況でしたが、「いわき市暮らしの伝承郷」から小麦藁の提供を受け、さらに同館所蔵の藁馬を参考とし製作しました。



【左:『定例帳』・右:鏡餅】

○盆棚:「盂蘭盆棚ハ当年生之若竹四本切棚ノ四角へ立、小手縄ニ而結付杉葉ヲはさむ、素麺大角豆を掛る」以前は棚の両脇に竹を立て、杉葉と鬼灯を縄(藁が手に入らないので棕櫚縄で代用)に挟んでいました。素麺の掛け方は田子家を参考にしました。なお、定例帳には載っていませんが、前々から家では送り盆に団子、米、茶葉をカラムシの葉で包み先祖さまへの“土産”としています。《なお寛政12年(1800)又左衛門が17歳の時に写した長谷川安通著『農家年中重宝記』にはカラムシの葉に団子を包むとの記述有り》



【左:『定例帳』・右:盆棚】



【左:『農家中重宝記』

右上:田子家の盆棚(部分)・右下:“冥途の土産”】

以上『定例帳』をもとに再現を試みましたが、もし先祖又左衛門が見たらきっとコレジャナイと苦笑いするかもしれません。現代に生きる自分には、何が書いてあるのか？書かれていない→やっていないのか or 当り前すぎて記すまでも無いのか？色は？味は？等々判別しがたいものがありました。これは当時の人が、当時の仕来りを書いたものであり「昔の常識は今の非常識」を痛感しました。その事を含めて『定例帳』が当時の暮らしを知る上で貴重な史料であり、また、再現には親戚や自分

の家、伝承郷などで行っていた行事がベースになっており、文字にならない大切なものが現代にまで伝えられているということも再認識することができ、よい経験となりました。

なお、四家家『定例帳』は『福島の民俗』第47号～49号(2019～2021)に収録されています。(会員 四家筆久央)

◆ 富永真理恵氏

白河市権兵衛稲荷神社の農耕彫刻について

白河市松並にある、稲荷神社(通称 権兵衛(ごんべえ)稲荷)は、小峰城下の南西端、旧奥州街道沿いに鎮座している。拝殿と神殿からなる同社には、いくつかの農耕彫刻が残っており、毎年2月の初午祭りになると五色旗が奉納されるなど、今でも地元の人々の信仰を集めている。



【神殿:神殿は雨覆の中にある】

神殿の農耕彫刻は正面を除く外壁3面に彫られている。神社の建立年代は未詳だが、神社に伝わる由来書等によると、文政年間(1818～1831)以前に建立され、嘉永年間(1848～1854)に建て替えられたとされている。彫刻は半肉彫りで、制作年代は『白河市史』※1に「明治34年(1901)に奉納」とあることから、建て替えられた当時からで

はなく、少し時代を経て奉納された彫刻とも考えられる。

神殿彫刻の3面は「春から秋」までの季節を表現した彫刻となっている。右側面には、苗代の代かき、エンブリによるならし、種まき、種籾洗いなどの「春」の様子が彫られている。後面には、昼食又はおやつを運ぶ親子、本田の代かき、苗取り、田植え、稲刈りなど、「春・秋」の様子が彫られている。左側面には、千歯扱き、唐箕、籾摺り(スルス)、稲運び、子守りする女性、倉入れなど「秋」の様子が彫られている。



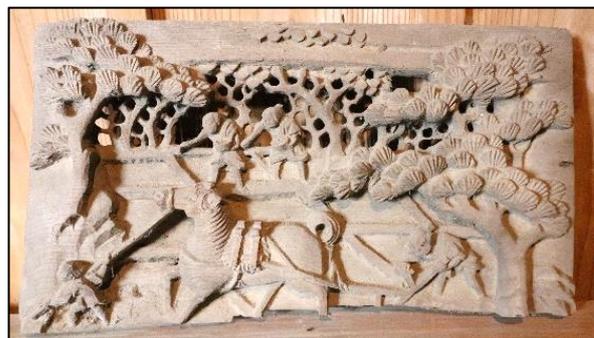
【神殿外壁の彫刻：早苗を配る男と菅笠とタスキを掛けて、田植えをする早乙女】

なお、拝殿の長押には現在の神殿とは別物と思われる彫刻板3枚が仮安置されている。いずれも「春」を表現しており、代かき、種まき、種子籾洗い(または種子籾浸し)、芽出しなどが描かれている。この彫刻の制作年代や制作者は不明だが、彩色も無く透かし彫りであり、神殿の彫刻と顔の彫り方等が異なっている。また、大きさに神殿の彫刻より小ぶりであることから、過去に欄間や天棚に使用されていた農耕彫刻の一部であったと考えられる。

農耕彫刻は隣県の栃木県などで本殿や天棚に彫られた事例があるが、県内で確認されているのは、本殿欄間に彫刻された福島市の篠葉沢稻荷神社と本殿外壁に彫刻された双葉郡広野町の太田農神社の2例に留まっている。今回報告した権兵衛稻荷神社の農耕彫刻は、朱色や青色、白色など、彩色が鮮やかに残っている点や、半肉彫りでかなり立体的に彫られている点などに特徴があ

る。

今後は他事例との比較を行うとともに、市内における農耕彫刻を含めた社殿彫刻の状況等について、引き続き調査研究を行っていきたい。



【拝殿長押の彫刻：種まきと代かきをする男性】

※1 『白河市史』第九巻民俗(白河市、1990年)、394頁

(会員 富永真理恵)

フォーラム 「浜下り」の祭りを語る



【フォーラムの様子】

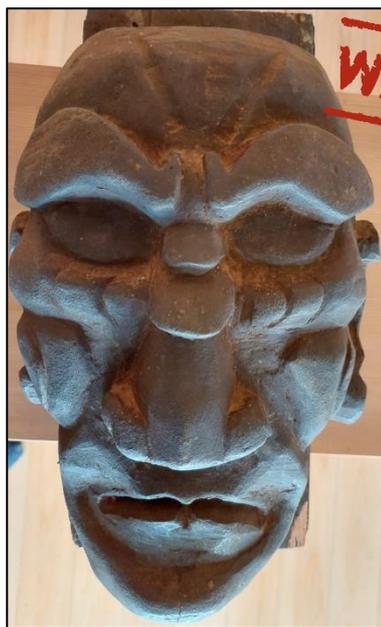
令和2年3月、福島県新地町からいわき市までの「浜通りのお浜下り」が、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選定された。広域に広がる祭り行事で、浜まで神輿が渡御し、神体と潮に接する点に特徴がある。このフォーラムは、令和4年度に記録作成のための調査委員会によって悉皆的調査が始まったことを機に、「浜下り」調査研究の過去と現状、今後の課題について語りあうことを意図したものである。

県内の浜下りの分布を明らかにした佐々木長生は、昭和40年代半ばの自身の調査記録を振り返

り、時間の経過とともに調査記録は価値が高まること、読み直しは新たな発見につながることを指摘した。丹野香須美は、調査委員会の調査の経緯を紹介しながら、初めて実施した悉皆的なアンケート調査を集計し、分布の偏りや、祭礼の性質の違いなどを指摘し、今後の調査の方向性を示してくれている。岩崎真幸は「浜下り」という用語は、相馬中村藩では江戸時代初期には用いられていること、中村城下の幕末の「浜下り」は盛大な祭りであったことを記録から読み解いた。

「浜下り」は、地域力を保持し帰属意識を高める重要な地域の祭礼であるにもかかわらず、原発事故による住民の離散や少子高齢化が存続を危うくしており、重い課題への答えも求められている。

(会員 岩崎真幸)



こちらは、県内で唯一の報告例となっているいわき市鹿島町のカマガミです。木製で縦33 cm・幅22 cm、厚みが12 cmほどで、板に打ち付けられ、竈の上で「火伏

せの神」として祀られていたことまではわかっていますが、来歴が全くわかりません。なぜ、ポツンと1例だけあるのでしょうか。県内の類例等と合わせて、何か情報がありましたら、ご教示いただければ幸いです。(会員 丹野香須美)

サイトリニューアルのお知らせ

今年度総会にて承認されました「Web サイト」のリニューアル作業を進めています。独自にドメインを取得し、レンタルサーバーを契約して運営を開始します。新しいURLはこちらです。



fukushimafolklore.com

これまでのコンテンツに加えて、さまざまな情報発信をしていきたいと思えます。会員の皆様の積極的なご参加をお願いします。(編集担当)

ふおーらむ・F 原稿募集中!

「ふおーらむ」は、誰でも気軽に投稿できます。地元の民俗芸能や祭礼の情報、ちょっと見かけた不思議な民俗事象などなど、ぜひ情報をお寄せください。写真1枚・200字程度のものから受け付けます。左の「カマガミ」のように、広く会員に情報提供を求めるようなものでもOKです。基本的にメールをお願いしていますが、郵送でも結構です。小さな情報をたくさん集めていきたいと思えます。(編集担当)

つづ
や記

連日、猛暑が続いています。こうした暑さの中で行われる夏祭りは、熱中症の危険と隣り合わせ、という事態に陥っています。残暑の厳しさも気になるころです。みなさま、祭礼調査等、フィールドワークの際には、くれぐれもお気をつけください。水分補給もさることながら、帽子等の着用も忘れずに。(た)



福島県民俗学会通信誌『ふおーらむ・F』17号 2023(令和5)年8月31日発行

編集・発行:福島県民俗学会(会長 岩崎真幸)

通信誌編集担当:丹野香須美